

はじめに

知内町教育委員会 教育長 田中 健一

第二次知内町子供読書活動推進計画が多くの皆様のご支援の下、完成する運びとなりました。

今次の取組では、「子供策定委員会」を組織したことが特筆されます。各小学校、中学校、高等学校から12名の策定委員を選出していただき、熱心な検討会を開催できました。「読書」は、ともすれば大人から子供への一方通行の指導になりがちで、「押し付け」的な危険性も危惧される要素でした。「子供策定委員会」においては、学校図書室や中央公民館図書室の現状、読書イベントの現状を子供たちの視点から洗い出し、今後の具体的取組等についての方向性を見出しました。

「読書はなぜ必要なのか」と問われれば、何と答えるでしょうか。電車の中では、スマホを手にした大人。新聞、本を手にしている人はほとんどいません。活字よりも映像のほうがずっと理解が早いです。ここで、映像と本による受け止めの違いについて考えてみたいと思います。物語等を読んで、それが映画化された作品を見た時の違和感はありませんか。映像で見る人物の内側に入って、その人物の心の中で起こっていることをリアルに体験することはできません。動いている音の出る映像が見るものを支配し、同時に自分の意識を働かせることをほとんど不可能にしてしまっているのです。物語なら止まりたいところはゆっくり止まれるし、主人公の意識についてだけ想像力を全開にし、その他の部分は軽く受け取っていくことも可能となります。読書は想像力を育てるといった指摘はこの点なのでしょう。また、子供にとって「読書」はより多くの人との出会いです。今子供たちに影響を与えてくださる大人は何人いるでしょうか。保護者、祖父母、叔父、叔母、兄弟そして学校の先生でしょうか。でもこんなに多くいれば幸せなほうです。保護者と先生だけというケースだって少なくありません。大人との出会いがより多ければ、子供たちの人生観も広がっていくし、地域への関わりも拡大していきます。「読書」は現代の子供たちを育てると言ってもいいほどです。

誰でも心に残る一冊をお持ちのことと思います。その本はどうして今も心に残っているのか考えてみて下さい。ドキドキした内容、自分で初めて買った、プレゼント、先生からの紹介など多様な切っ掛けがあります。本の後ろにも人がいるのです。こんな体験をぜひ子供の時代に積み上げさせて下さい。読書活動推進計画は、子供たちの心を育てるための「お手伝い」と思ってください。

終わりになりますが、策定委員の皆様には、子供たちの未来を拓く一つの指針をしめしていただきましたこと、心より感謝申し上げます。この「知内町子供読書活動推進計画」が学校・家庭・地域で広範に活用されますことを願っています。